知つたふり

泉鏡花作

全一章

談、漢洋に及び加ふるに佛典に參した處は、甚だ博識らしいが、お聞きになる間に、おのづから筆者の種本の露れる處が、御愛嬌に成る。

漢の方が齊諧記。佛典が舊雜誓喩經にある話で、洋の方が、子供衆も御存じの、アラビヤンナイトの……高い聲では申されぬが……譯本にある。

尤もアラビヤンナイトは、念のため原書に就いて、

It is written in the Chronicles of the Sassanian momarchs と云ふ冒頭から、經營慘憺一字づゝ、イツトが（其）で、イズが（有る）……（一寸笑つては不可ませんよ」と遣つて見たが、肝心見たいと思ふ、大魔王の妾の、美に

して艶なのが、九十八人くの密夫を持つたと云ふ處が全節拔けて居て見當らぬ。

聞いて見ると、普通ありふれた學枚用の分には、事件が怪しからんとあつて、教育者のために削減されたのださうで。丸本をと、編輯局の好男子、前矢の倉の住人當時濱町の若旦那に、丸善へ出向いて貰ふと、有つた。有つたは可いが、此の値十圓は手輕くない。其處で太郎兵衞、太郎兵衞、太郎兵衞と、大屋様の名を三度口早に唱へて買ふのを留めた。譯本でも條は通る。此のアラビヤンナイトと、他の話と比較して、面白く出來て居るのは、横寺町先生の、有名な「東西短慮の刃」で、口演さへ彼の通り、多大なる興味があるが、私のは書いたのだけれども、一向妙でない。其邊は御免下さい。

さて、本文は、先づ齊諧記のを一ツ書取る。此の齋諧記は、五雜俎にも、齊諧夷堅は小説の祖なり、と云ひ、原は莊子に、怪を志すもの也として此の書名が出て居る。偶言で、虞初八百卷今其の書なし、と一般に、實物はあやふやださうで、梁の呉均撰、

續齊諧記と云ふのより他にはないとの事。

其の中にこんなのがある。

むかし許彦相と云ふ、其の時分の軍鶏屋であらう。鵝鳥を入れた籠を振分けにして、天秤で擔いで、綏安山と云ふのを通ると、途中で、十七八の書生の石を枕に横になつて居るのに逢つた。で、其の書生の云ふことが途方もない。お前の行く方へ出掛けるのだが、脚が痛くつて動けないＲｕｂｙ＞一寸其の籠の中へ入れて頂きたい。原文は、脚痛鵝籠の中に寄らんことを求む、である。

人を馬鹿にしたと思つたが、氣の奸い小父さんで、彦がよし／＼と頷くと、其の書生足も縮めないで、最う籠の中に澄した體は、小兒の土産に起上小法師を買つた形。

怪むべし、籬が大きくなつたでもなければ、書生が小さくなつたでもなしに、雙鵝と並坐して貯も鵝も驚かず、とあるから、ばた／＼羽叩きもしないで、

同一やうにちよこなんとして、けろ／／と乗つたものである。

歩行出すと重さを覺えぬ。其まゝ前行いて樹下に憩ふ、と云ふまで、好い景色だね、とか何とかあつたらうが、其は書いてない。大和ぶりに、雲助馬士などゝ、乗人との捨臺辭を斟酌しても、籠に鵝鳥と乗合のお客では、膚合が違つて、何とも饒舌らせるわけに行かぬ。其處で樹の下に憩ふと、書生が底を拔いたやうに籠から出て、小父さん、御苦勞だつた、お禮に一口獻じやうと云ふ。許曰く「善」は極めて簡潔で可い。下地は好なり御意は、と註するまでもないのである。

唯其の書生が、ハツと口中から銅の奩を吐出したが、奩を開くと、忽ち酒あり、肴あり、但皿小鉢不殘銅製で、味も香も世に稀に見る處であつた。

てんと堪らずで、飲はじめる。酒數行にして、書生、彦小父に謂つて曰く、實は道連の婦があつながら、合乗は餘りだ、と控へたので、唯今是へ呼びますが、

と云ふから、彦とろりとした目で、うむ、善いとも。

途端に、ハツと又口から女を吐いた。年十五六ばかり、衣服綺麗、容貌殊絶、は人事でも惡くない。

いやゝ飲めるわ、と彦も最う他愛がなくなり、美人の酌で、さいつおさへつする内に、書生は醉ひ倒れてころりと寢た。寢たものも、未だ飲むものも、酌の美人も何處だと思ふ。綏安山の山中、一樹の下である。四邊は白雲と青山のみ。

一寸思出したから書加へるが、此の話は、江戸時分の、誰かの隨筆の中あるのを、小兒の折に讀んで、うろ覺に覺えて居るが、それには能登の國の怪談にして、彦を鵜飼にして、書生を確か膝行の乞食にしてあつたと思ふ。住い手際で、鵜飼と云ふと、日本では何となく因縁があるやうだ。　ーー　膝行の乞食で尚ほものありげで薄氣味が患い。其上、綏安の山を替へて能登の國へ持つて行つた處に少なからぬ妙がある。能登と云ふと、何となく古代祕密の俤がある。奥能登へ行くと、今でも道端へ草鞋をつなぎ

捨てにして、勝手に鳥目を置かせて、其の買ふに任せて商ひをすると聞いた。

話が戻つて、書生が醉倒れたのを熟と見ると、美人が麗な聲を出して、彦小父に向つて、私は無理に此の人に何されて居るので、口惜しいから、私もまた可愛い男を秘して持つて居ます。内密で其を此處で呼びたうございますが、貴下や、と色目づかひをされて、彦曰く、まゝにさつせえ。

其處で、女が白酒に醉つたやうな可愛い息を吻と吐くと、口の中から一人の美少年が莞爾して出た。年二十三四ばかり、

（頴悟可愛）　と本文に書いてある。

詮を爲すものあり、否、説を爲すものを待つまでもない。我等岡燒連の目から見ると、女に吐出される色男、何が頴悟だらうと思ふが、然うでない。美人に思ひ込まれ居たのである。

件の色男は、丁寧にとろんこの彦に挨拶をして、

さて睦まじく振事に成る。いや、何うも見て居られぬ。其内睡つて居た前の書生が、むず／＼と動き出した。これは夢見が惡かつたものであらう。

美女また口中から、錦の帳を吐いて、間を遮つて、憚らず癡話つたが、やがて書生の手を伸ばして寢返りを打つのを見て、一寸、旦が起きるよ、と云つて、慌てゝ、吐出した美少年をすつと吸ふと、逆に咽喉へ通つて、乳のあたりで蠢く、雪なす胸は、李の花の風に搖るゝが如くして、口を拭いて澄して居ると、書生はむつくりと起きて、やあ、日が暮れると、則ち、簪を拔けとも言はずに、黒髪から美女を飲んで、紅の裳のからんだ齒を、こぼれ松葉の銜楊枝。飲んだ酒も醒め果てた彦に、然らば、と笑うて別を告げて、記念の爲に、其の腹から出》した銅の皿を一枚與へて、夕雲ばかりに成りにけり。

たゞ、夕陽の色の變らぬだけを便りに、とぼ／＼と歸る彦の顏を見て、籠の鵝鳥が羽ばたきして鳴いた、と云ふのが、齊諧記の話で。

舊雜譬喩經のは、浮氣も書き方で、莊嚴端麗。

昔國王あり、女を護持すること急なり。正夫人、太子に語つて曰く、我汝の母として汝を生じて、國中を見ず。一たび廻り出でゝ國の状を見んことを欲ふ、汝よく王に白せよ。是の如きもの三たびに至る。太子、王に申して則ち聽さる。太子自ら為に車を御し、母夫人を乗せて、宮を出づ。

群臣路に於て奉迎して拜を設く。夫人時に白やかなる手を出して帳を開き、人をして見ることを得せしめき。

太子嗟嘆して、即ち詐つて腹痛を訴へ、立處に車の轅を引返す。夫人怨んで曰く、我たゞ、手を帳外に出せるのみ。太子おもへらく、我が母尚常に如此。何ぞ況や僉を乎。

即ち國を捨てゝ去つて山に入つて遊觀す。道の邊、一樹あり、下に清泉あり。一の梵志と相見る。ともに樹に上つて遊び、水に入つて浴す。浴已んで飲食

す。梵志爾時に術を爲し、一の壺を吐いて出す。壺中に女と屏處の室あり。梵志兩ながら、取つて寢ねぬ。

女人頃刻して復一壺を吐く。壺中に男あり。復た共に臥しぬ。臥し已んで壺を呑む。

須臾の頃、梵志起きて復た婦を内にして壺中に封じ、杖を持して去んぬ。

太子國に歸つて王に申して、諸臣を召し、梵志を招いて齋す。梵志一人至れば前に三人の食膳あり。梵志驚いて曰く、我れたゞ獨なり。太子の曰く、汝當に婦を出だして、共に食せよ。梵志恥ぢて已むことを得ずして婦を出す。太子婦に曰くい汝當に夫を出して共に食せよと云ふ。是の如くにして食正に三。婦已むことを得ずして男を出して共に食す。食し已んで即ち去りぬ。

齊階のは殆ど是と同一である。が、御經なれば、夫人が輿中より出し給へる樂欲の御手さへ、縋れよ、

餓鬼、とて、一尺の玉を紫の雲の中より差伸ばし給へるやうで尊いのである。

アラビヤンナイトのは、壺が稍子函に成つて、四偶の鍵をかけて、おまけに海の底へ入れて、魔王が其の妾を祕藏したが、それでも忍び／＼に九十八人の密夫と語らつて、後に、スカーリヤ、スカーゼナン兄弟の年少き國王に契つて、指環の數を百に滿さすことに成つて居る。

本文は人も知つたり、長いから此處には載せぬが、其兄弟の王は、兩人とも其の愛妃が、一人は侍臣に、一人は奴隷の黒奴に姦通したために、世を果敢なんで、手を取つて國を棄てゝ、或海邊を彷徨ふ折から、浪逆立ち水に黒煙湧く中から大漢があらはれた。兇惡無雙、掴んで啖はれさうな恐しさに、兄弟が慌てゝ傍の大樹に攀ぢて葉がくれに成る。其の樹の下へ來て、大事さうに海の中から頭へのせて出た硝子函を、四個の鍵で開いて、窈窕嬋娟たる美人を引出して、涎を流し、手を握つて、こんなに思つちよるに、おはん可愛がつてくれ、些とはあはれと思へ、　コワ！

と薩摩辯で口説く、しなだれる、やがて美人の膝枕に倒れる。兩脚が海へ届いて、鼾で波が鳴ると云ふ。顔面兇惡、一睨して人を殺す底の大男兒が、此の體は如何でこざる。何處の國でも恁う云ふ豪傑にかぎつて、のろい。

其處で魔王の睡つた隙に、其の美人が手招きして、樹の上にふるへて居る兄弟の王を誘うて、指環の契、と云ふことに成るのである。細く云ふと、齊諧記のも綏安山上の樹下で、雜譬喩經のも樹下で、アラビヤンナイトにも樹がつかつてあるが、同巧異曲、何にしても、婦を嫉んで、壺に秘め、海底に幽して、然も鼻毛を拔かれるのにかはりはなく、三國傳來不思議はない。江戸の知己が、長崎で遙つて、是は奇遇だ、お久しぶりと、手を拍つと同一である。あゝ、婦を嫉むものは禍なるかな。其の甚しきものは愚なるかな。

【完】